



東京藝術大学国際交流棟(東京都台東区)

警固竹友寮(福岡県福岡市)

KITOKI(東京都中央区)

▶ 特別ディスカッション

木材のよさを活かせる「混構造」で頑強さと温かみを併せ持つ建物を実現

脱炭素社会の実現に向けて実施される「サステナブル建築物等先導事業」(主催:国土交通省)では、炭素貯蔵効果が高い「木材」を最大限に活用しながら、設計・施工で先導技術を導入したプロジェクトの支援を続けています。今回は、本事業活用プロジェクトの3件である「東京藝術大学国際交流棟『Hisao&Hiroko TAKI PLAZA』」(2021年採択)、「警固竹友寮」(2021年採択)、「KITOKI」(2020年採択)について、設計者等をお招きして座談会を開催。混構造木造建築の設計・施工のポイントやメリット、注意点、そして今後の課題などについて意見をいただきました。

建物概要と特長

施工音なども考慮して混構造に

大橋●座長を務める大橋です。今回は、構造材料を2種類以上使用した「混構造」の建物の事例をご紹介します。木材とほかの材料を組み合わせることの課題やメリットを伺い、今

後、設計する人の助けになればと思います。

まず初めにお聞きしたいのが東京藝術大学国際交流棟「Hisao&Hiroko TAKI PLAZA」を手がけられた前田建設工業さんです。その混構造について、どんな考え方で建てられたのか教えてください。

永松●建設事業本部建築設計部の永松と申します。今回の建物は、国際交

流拠点とあって留学生が利用でき、食堂も併設しています。建物は地上5階建てで、1・2階を鉄骨造、3・4階を木造と鉄骨造の混構造、最上階5階は木造の平面立面混構造となっています。3階以上は、鉄骨造部分の床をコンクリートではなくNLT(Nail Laminated Timber)を採用したのが特徴です。これは北米を中心に採用されている材料で、構造用製材等を釘でつなぎ合わせており接着剤を使っていません。

木造化した理由は大きく分けて2点。「①工事車両の削減」については、音楽学部などのキャンパスが近く、騒音や振動を防ぎたかったこと。そして「②CO₂削減」もポイントでした。木造化で建物重量が減り、工事車両の搬入も削減でき、床にコンクリートを打設し

ないため騒音も軽減できました。さらに、建設時CO₂も、当社の試算ですが純粋な鉄骨造と比較し約28%程度削減となっています。

峯●建設事業本部構造設計部の峯です。今回は純粋に5階建て木造も検討されましたが、敷地が狭小なうえ2階に厨房設備が必要だったため、部分的に木造を採用するような混構造としました。

さらに敷地両側に既存建築物があり、一方向からの施工となるため、鉄骨造を建物の奥側、木造を手前側にするなど工夫しました。正面ファサードも木造ブレースを活用し、デザインとして木の温かみを感じさせるとともに、架構全体のバランスにも配慮しました。

大橋●今回の建物は、企画段階から参加されたということでしょうか。

永松●基本計画は大学側ですね。環境配慮からも混構造をご提案し、ご賛同いただきました。構造主体で考え、鉄骨部分の床としてNLTを採用し、メインフレーム部分は約9mスパンで柱を設けない空間となっています。

大橋●国内でNLTをこれだけ大規模に使っている事例は珍しいので、好事例になると思います。

運用時のCO₂削減も考慮

大橋●では続いて、竹中工務店さんの「警固竹友寮」(2021年採択)についてお聞きします。

田原●九州支店設計部の田原と申します。この建物は福岡県中央区警固にある当社社員寮で、1階はサテライトオフィスとギャラリー、2~5階は寮室の5階建てです。

この建物で木を活用した狙いは、当社も前田建設工業さんと同じくCO₂削減です。当社にとっての挑戦、そしてモデルケースとなるとも考えました。

建設時に木造を組み込むのは当然として、「通り土間」と呼べる半内部的な空間をつくり、自然通風しやすい環境として、運用時もCO₂を削減できるようにするなど、建物全体のライフサイクルに配慮しています。材質として土間はコンクリート、そして鉛直部材はすべてCLTにしなが、RC造のフラットスラブという構成にしました。

飯田●木造・木質建築推進本部の飯田です。今回は耐火建築物であることが求められたので、自社開発の「燃エントッドCLT耐力壁」を採用しています。これは2時間の耐火条件がある壁なので、各種条件をクリアしながら混構造が実現できました。

大橋●竹中工務店さんはCLTの活用や開発について尽力されている印象ですね。

田原●はい、CLTを活用した自社施工の研修所などでの宿泊は経験しています。今回の建物ではフラットスラブにしたおかげで階高を抑えられました。この敷地での建築制限でもあったので、混構造のメリットは多々あります。

「入れ子構造」で木材を活用

大橋●では最後に、「兜町85プロジェクト」として進んでいた「KITOKI」(2020年採択)について伺いたく存じます。

安齋●設計・施工を担当したADXの安

齋です。この建物は10階建てで、1階が飲食店、2階以上はオフィスという構成です。一部を入れ子とした混構造で、具体的には、4・7・10階部を3層のSRC造としてメガストラクチャーを作り、その間に木造床を2層分入れ子としています。

クライアントはまちをアップデートするような取り組みに挑まれており、この建物も、「未来を牽引する建物を造ってほしい」とご依頼いただきました。すべて木造も視野に入れつつ考慮した結果、今回の混構造をご提案したのです。このメリットとしては、フレーム部分は100年耐えうる機能を持ちながら、木の温かみを感じられるエリアも実現できます。また構造として力学的な強さと柔らかさの両面を持ち合わせることもできます。

これにより、将来の活用法も多岐に広がります。入れ子部分が木造だと可変しやすいですね。

大橋●新しい架構構成の魅力的なプロジェクトですね。

名和●構造を担当したなわけんじムの名和と申します。以前、ビルで上下2フロア借りている企業から床を抜いてと言われたことがあり、そんなニーズがあるんだと感じていました。この建物はそれが実現できます。

木造はメリットも多いですが、長期的に強度面や耐火に対し、特に都市ではまだまだ不安があります。その時強



■モデレーター

東京都市大学 名誉教授
一般社団法人 木を活かす建築推進協議会 代表理事

大橋 好光 氏

木造建築の構造を長く研究。木造軸組構法住宅について実大振動台実験を多数行う。熊本県立大学や東京都市大学で教鞭をとり、2020年東京都市大学名誉教授。



度等の高いもので大きな区画、安全を担保し、その中の小さな区画に旧家などもみこした木建築を入れ子とする構造構成は無理なく都市に木造を組み込むことを考えた場合、すごく意義があると感じています。それぞれの構造が特殊でないもの組み合わせでできることも汎用性があると思います。

安齋●ちなみに建材にもこだわっており、金融のまちとして知られた兜町にあることから、秋田県由利本荘の森林組合と連携して管理している「東証上場の森」の木材を一部活用しました。もちろん耐火面も万全で、燃え止まり層に石膏ボードを使用した木質耐火部材を採用しました。

混構造の課題と解決策

確認のため実物大モックアップも

大橋●それではプロジェクトにあたって感じた課題、そして解決策、そして実現できなかったことがあればそれを教えてください。まずは「東京藝術大学

国際交流棟」からお願いします。

永松●私が当初に感じていた課題は2つです。①木造部と鉄骨部の接合と②NLTの伸縮です。順に説明しますと、①においては特に耐火に気を配る必要があったのですが資料がなく、実証実験して性能をしっかりと検証しました。②では、国内での使用実績が少なく、日本の高温多湿な環境でも問題ないか懸念があったため、こちらも人工気象室を使った温湿度環境試験を実施しました。施工を前提にした検証で、いづれも問題ないと確認して進められました。

峯●NLTについては、木材を釘やビスを使用して構成する床材です。施工省力化のため、ユニット化が求められおり、現場と協議しながら進めました。床スリーブ開口を含めて調整してユニット化でき、コンクリートと違い施工時の騒音もかなり低減できました。

また今回は施工も難しいと考えていたのですが、木造ファブリケーターのとび職人に鉄骨経験者がおり、どちらにも配慮した施工が実現できました。

永松●一方で課題も残りました。今回

は一部木材に外国産を使う予定でしたが、コロナ禍やロシア・ウクライナ問題による輸入木材の高騰が直撃し、設計段階の終盤で再選定しました。価格変動を考慮した木材の選定は今後の課題ですね。

峯●また私としてはNLTの活用の面で、床のロングスパン化が実現できなかったのが課題と感じています。継手の設計手法をうまく取りまとめられず、短スパンを採用したのですが、今後またチャンスがあれば挑戦してみたいです。

大橋●ありがとうございます。ちなみに先程お話にあがった、とび職人さんが木造も鉄骨も経験されている件、竹中工務店さんも同様の事例が多いかと思いますが、どのように対応されていますか？

飯田●弊社では、鉄骨のとび職人さんが工事できるような形に木材の部分を整えていくことが多いです。高層の物件だと鉄骨先行、のちほど木材施工ということが多く、低層の場合は敷地の工事条件によってさまざまですね。

田原●また弊社事例の課題だと、CLT

前田建設工業
株式会社

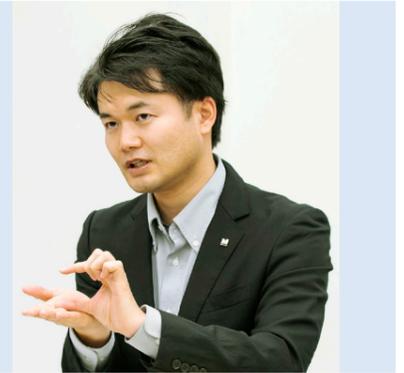
建築事業本部 建築設計第1部
設計第1グループ
グループ長

永松 航介氏



建築事業本部 構造設計部
構造第1グループ
チーフエンジニア

峯 充氏



構造と比べて、床をRCフラットスラブにしたことでCLT壁への軸力が5~10倍とかなり大きくなることでした。そのため十分な数値を確保できる設計とすうえ、実大モックアップで水平抵抗力が発揮できることを確認するなど、入念な調査を実施しました。

合わせて、CLT壁とRCフラットスラブの接合部の施工品質管理も、経験不足から不安を感じていましたが、こちらも実大モックアップを作成して、注意点を明らかにすることで問題なく施工できました。

飯田●難しかったのが、RCスラブを打設する際、CLT壁にコンクリートのセメントペースト(ノロ)が流れないようにすることです。CLT壁は仕上げも兼ねているため木材の日焼けの面でもかなり気を配り、UVカットの養生シートを徹底していたので施工中は外せず、竣工前まで仕上がりが確認できず不安でしたが、徹底管理した作業のおかげできれいな仕上げを実現できました。逆にいえば管理が難しくれば、仕上がりに不安が残るかもしれません。

田原●また私が感じた課題は施工期間です。床もCLTとしたCLT造の場合、RC造やS造と比べ短工期で施工できますが、今回はRC造と比べて少し短工期にできたもののCLT造ほどではありませんでした。今後はプレキャスト化

なども視野に入れて、工期短縮を目指したいです。

永松●モックアップについて教えていただきたいのですが、どのくらいの期間配置しましたか？我々もNLTで実験しましたが、時間を確保できず2カ月程度の確認しかできませんでした。

田原●このモックアップは施工の問題点を洗い出すために造ったので、約1年弱は配置しながら経過を見ました。木材の膨張や収縮をじっくりチェックするわけではなかったのですが、想定範囲内の隙間ができるのが確認できました。

飯田●モックアップの実験は年単位の時間がかかるので、その前提で計画しなければいけませんね。経年劣化まで加味すると、より長期間が必要ですし、現状はハードルが高いのがネックです。

施工では想定と異なる対応も

大橋●では「KITOKI」で感じた課題などを教えていただけますか？

安齋●当初から適材適所となる構造利用材の棲み分けに腐心していました。型枠自体がユニークなものを1~3階部分で使っているのですが、規模が大きくなっても建物全体としては安全性も確保できると思っていましたし、実際問題ありませんでした。型枠ですが全

てNCで加工して、凹凸の柄をつけるなど独自のもので、型枠自体も終わった後違うパーツに転用するなどフレキシブルに活用できました。

名和●また予想外だったのが施工時の対応です。当初先にメガストラクチャー部のSRC部を建設し、入れ子部の木造層を差し込んでいって完成という理念をそのまま作り方に反映する想定でした。実際の施工時は仮設足場も兼ねて入れ子木造床部をSRC造の建設と交互に行いました。理念を変容させる施工が経済性・施工性も今回はよかったです。

今後対応が可能である、入れ子木造床を抜くなどの改修施工に対してですが、当初は外付けリフトなどを特別に設置した資材の入れ替えを想像しました。現場に通いながら感じたのは現在の設計ではそうなっていませんが、通常利用エレベーターを用いて搬入、搬出できる小部材からなる木トラス材などで木部を組む構造、耐火の仕様があればより入れ子部の経済的可変が可能となります。今後の案件でヒントになればと思いました。

ちなみに当初はすぐにでも入れ子構造に古民家を組み込むようなこともしてみたいと考えていました。ただ、現状では建物全体で上から何層までが何時間と決められていて、木をそのま



東京藝術大学国際交流棟
(東京都台東区)

コミュニティサロンや食堂などが入る5階建ての国際交流拠点。下層部分が鉄骨造、上層部分が木造で、大学を訪れる国内外の方々に、日本の木造建築技術をPRできる。また3~5階の西側外観はパブリックアートで飾り付けられ、美しい空間となっている。

ま入れ込むことは難しいことを改めて感じました。今後、古い家をそのままビル内に入れられるような建物にもチャレンジしてみたい。そのための、特に耐火に向けた法制度の整備に期待しています。

大橋●非常に面白いご提案ですね。今後の実現に期待がかかるアイデアだと思います。

さて前田建設工業さんにNLTについて伺いたいのですが、木は加工しやすいから後で手を加えられる印象がありますよね。実際、NLTの場合、例えば床開口を後で空けることはできるのでしょうか。

峯●ユニット化されていれば、そのユニット内で対応できますが、施工後に穴を空けるのは難しいですね。やるのであれば、加工範囲を事前にしっかり決めておくことが大切かと思います。なお、日本ツーバイフォー建築協会でもさまざまな実験を行っており大いに参考になりますが、実際の施工のときは実証実験が必要ですし、当社としても実施したいと考えています。

名和●私もNLTについて伺いたいので

すが、部材の精度誤差に対する配慮や工夫を差し支えない範囲で教えていただけますか。

峯●レベル調整も加味して鉄骨に直に乗せるのではなく、上に60mmほどの部材を配置し、鉄骨側からはナットを溶接することで木を組み付けて、その上にNLTを乗せてビスで固定しました。一度受材をはさむことで、施工性の高さや安定性を両立させています。

大橋●「東京藝術大学国際交流棟」の施工現場を見学させていただいた際、最後に調整するという旨を伺ったかと思えます。詳しく教えていただけますか。

永松●やはり木材の特性上、多少膨らむなどの変化があるからです。例えば施工中に雨が降ってしまうだけでも変化することもあり、調整できる区間をつくっておかないとまずいですね。ただNLTの可能性は大きいと感じていて、今後施工においてはさまざまな課題がありますが、一般的な住宅木造レベルであれば使えると感じています。都市の高層建築物などに活用する場合も、どこまでCLT同等の性能がとれ

るかを確認する必要がありますが、今後に期待できると思います。

混構造の 今後の可能性

「木が見える」は顧客から強いニーズ

大橋●それでは混構造の可能性について、今回の事例を通して感じたことを教えていただけますか。今後普及に向けた課題や制度などのご意見も伺いたいです。まずは前田建設工業さんから。

永松●私は耐火被覆が今後の課題だと感じています。木造の中高層化には混構造が主流になっていますが、木造・鉄骨造それぞれは告示が明確なもの、接合部分の耐火処理方法はあいまいなままです。法整備がされていけば、私たちのような設計者も設計時に明確な方針が出せます。都度実証実験するのは、なかなか難しいでしょう。

峯●また施主の希望として、木造を一部でも活用したら「木が見えること」が要望としてほぼ必ず出ますね。当然の



警固竹友寮(福岡県福岡市)

CLTパネル構造5階建ての社員寮。1階にサテライトオフィスと会議室兼ギャラリーを備えている。福岡市中心部にあることから、周辺環境と調和するよう住戸内に通り土間を設け外部を連続させることで、人とまちがつながるような外観デザインとして仕上げた。



株式会社
竹中工務店

木造・木質建築推進本部
技術グループ
チーフエンジニア

飯田 智裕 氏

九州支店 設計部
構造2グループ
チーフエンジニア

田原 桂太 氏

ことだと思います。しかし、大規模化していくと耐火建築物にする必要が出て、構造体に対して被覆が必要になり木が見えなくなってしまいます。実際過去の施工例で、建設中の見学では木のインパクトが伝わるのですが、それが全部隠れるとなると、皆さん落胆されます。安全上の課題があるのは承知していますが、木を見せやすくする技術の進化、そして柔軟な法整備が進めば木造の普及がより一層進むのではないのでしょうか。もちろん簡単ではないですが、「見える」というのは、木造を選ぶ大きな理由だと思います。

大橋●接合部に関しては材質も相手が鉄かコンクリートか、それによって変わってきますが、いろいろな事例を積み重ねて標準化する必要がありますね。

飯田●混構造の接合部は、竹中工務店でもさまざまな研究を進めています。木材自身が接合部でめり込みながら変形するため、剛性が変化しないかしっかり確認し、耐性も高まるようにしたいと考えています。

田原●カーボンニュートラルの面から見て、「木質化」は建築業界で主要命題になっていると感じます。そんな中で、今まで培った技術も活用するために、鉄骨造や鉄筋コンクリート造と木造を組み合わせるのが、目指すべき姿では

ないでしょうか。「木」という材質が加わることで、建築主・設計者への提案の幅も広がりますし、ひいては都市景観も変化して、さらなる木質化・有機質化が期待できます。また「見える」という部分では、よりよい耐火仕様の塗料などが出てくれば、より広く普及するかと思います。

飯田●現状は制限がありますが、行政をはじめ、業界全体でもう少しハンドリングがよくなると、混構造がさらにポピュラーになると感じています。

大橋●スーパーゼネコンがモックアップなどを造って実験していただいているのは、大変ありがたいですね。御社をはじめゼネコン各社の情報を国土交通省営繕部など公的機関が集約して、標準納まりなどにまとめてくれるといいのですが。

混構造ならではの特徴が打ち出せる

安齋●混構造は、個性の異なる構造材を組み合わせることで、社会や施主、利用者に求められる建物を生み出せるのが魅力だと思います。素材単体では特徴がなくとも、組み合わせ方でオンリーワンの魅力が生み出せる。そんな部分が素晴らしいと思います。

名和●またデリケートな話題になりますが、コストに対する社会に対する示し方は今後の課題かと思っています。

木材を使う場合「安くなるんですか」とよく聞かれることがあります。この点について個人的な意見ですが、木造を利用することで逆に高くなってほしい想定もあることを、伝えてよいと思っております。実コストはさておきと断っておきますが例えば今回手がけた「KITOKI」の場合、入れ子構造における木造床部は脱着可能な構造のため将来のリフォーム・リノベーションがより楽で多様となる特徴がある、という考え方ができます。例えばこのメリットをしっかりPRして理解いただけた場合、その特徴に対しては付加価値を費用として納得いただけるのではないかと、という考え方です。また木造は、皆さんも体感的に共感されているように居住性がよいと思います。実際、コンクリート造の住宅や学校は、自分の場合、長時間過ごすときの痛みを感じることもあり木造だと起こりません。また木材の湿度調整機能からくる発汗できる心地よさなどあり、この点をあえて構造材としての価値として積極的にアピールすることはよいと考えています。

大橋●木造建築の医学的メリットは調査・研究が進んでいますし、それらを活用して、コスト面以外のメリットを打ち出せばいいですね。混構造は安くなる要因が少ないと思います。コスト競

争になるとなかなか難しいかと思いますが、チャレンジしていただきたいですね。

私も最上階を木造にするのはいいと思うのです。構造的にも屋根が軽くなるメリットもあります。RCだと重いからです。

飯田●当社の見解だと、ある程度の規模になると純木造だと逆にコストがかかるので、その分岐点を見極めて混構造を選ぶことが多いです。木造オンリーでは、耐火性能や振動・遮音などの面の課題が多々あります。その弱点を埋められるのが混構造です。社会的な意義を加味しても、SDGsなど世界的な動きからも推測されるように、木材は建築にとってマストの材料になると思います。また、混構造のいいところは、木材を半分だったり1/4だったり、何なら部分的に活用しようなど、使う量は一定ではないですし、利用法の幅が広がることです。そのうえで森林活用・森林再生にもつながるようなサイクルが理想で、それを続ければ循環型社会に貢献できるような建物が実現すると思います。

田原●ただ課題に感じていることもあって、先程永松さんからお話があった耐火性は解決すべき点が多いです。例えば鉄と木は燃焼温度も全く違うので接合部は細かな配慮が必要ですね。

またこちらも前述されていましたが、木材の安定供給の面も考慮に入れる必要があります。物量として多い場合もしっかり安定供給できるのか、正直現時点では想像できませんし、外的要因によっても大きく左右されます。輸入木材ならなおさらでしょう。建設業界全体で、業者が安心して木材を使えるような環境を整える必要はあるでしょうね。

大橋●木造化に関しては、コスト面・供給面を考慮しながら、メリハリをつけるのがよいと思っています。具体的には、見えないところは流通材を使い、その建物の見せ場の部分には集成材を使うなど、柔軟に対応するのがいいと思います。

永松●また内装制限が見直しされる際、木材活用を前提としていればいいのですが、現実はまだそうっておらず、今後業界全体の流れが変わってい

けばいいと思います。

大橋●そうなれば部分的な木質化はさらに推進されるでしょうね。木材を活用すると、やはり見た目の印象がぐっとよくなりますから。

塗料など周辺材料のさらなる進化を期待

峯●竹中工務店さんに伺いたいののですが、今回フラットスラブの床を採用されたとのことで、遮音性能を教えてくださいませんか。

飯田●当社は、いわゆる3階建てまでの「低層」タイプの建物の場合、遮音等級が「L-60」、つまり新築の賃貸住宅で求められるような性能を確保することを目的にしています。今回の場合はCLTの床と同等の性能を目指して、厚さも調整しながら進めました。遮音性能だけ見れば、重くして質量を上げればいいのですが、せっかくの木造が重たくなっても意味がないので、そのバランスはかなり難しいです。

峯●当社も今回の「東京藝術大学国際交流棟」では5階の一部だけコンクリートを打つ計画にしたのですが、遮音性能を木材のみで実現するのは難



しいですね。壁は二〜三重にしていけば何とか対応できますが。

田原●「警固竹友寮」は建物全体でのライフスタイルを考慮しているので、断熱性能や通風にかなりこだわっており、フラットスラブ自体は300mmとかなり分厚くしています。そのおかげで、高い断熱性能を誇り、夏場のクーラーをつける期間がかなり短く済んでいます。2023年春に完成したので、初めての冬を迎えるにあたって、データを計測・収集しているところです。

また通り土間はアルミのルーバーを設置し、日射を制限しています。今回は近隣の建物も全部モデル化して日射の取得率を細かく計算し、ルーバーサイズもシミュレーションのうえ決めました。

飯田●また今後は混構造に限らず、木材の断熱塗料も周辺材料がさらに進化してくれば、より使いやすくなると

思いますね。現在は粘度の高い木材保護塗料を使いますが仕上がりにかなり気を遣います。我々はモックアップを造って試験するのですが、どの会社もそれができるとは言えないでしょう。

峯●虫の対策もさらに進化すればいいですね。虫は一般的には地盤面から侵入するため、木造住宅では地盤面から1m程度、防腐・防蟻処理をしていることが多いです。

飯田●当社のケースだと虫は必ず来るとの前提で、超高層の場合、下階層をRCにしたり1mの高さの立ち上げを造ったりしてできるだけ侵入を防ぐようにしています。

大橋●今回の建物に限らず、屋外露出する木材はどうメンテナンスする予定でしょうか。やはり、木材は取り替えられるところに採用するのが原則ですね。

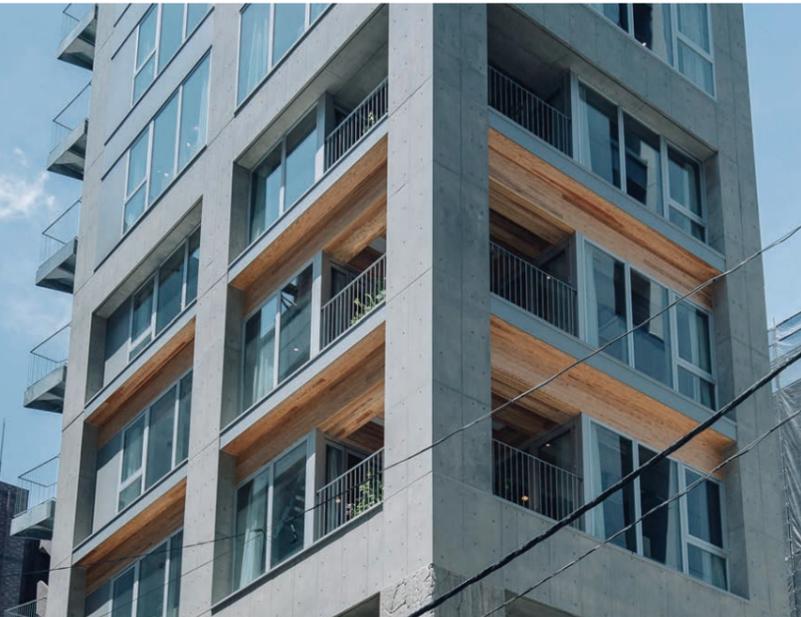
飯田●耐火被覆材は別途下地を組ん

だうえ、天候に高い耐久性がある外装材を貼るなどしており、直接構造体に雨がかからないようにしています。また外部露出も避けるなど工夫しています。

安齋●燃焼の対応はどうされていますか。特に煙が有毒だと使えないと思いますが。

飯田●耐火検証や避難安全検証等で煙の出る量を燃えぐさから計算して、どこまでなら大丈夫かチェックしてから施工していますね。

大橋●皆さん、本日はありがとうございました。混構造の課題と、そして未来も見えたと感じています。これから多層の建築物を木造化していくためにも、混構造は必要と感じています。また、木材の活用法はまだまだ可能性があることが実感できました。ぜひ皆さんには今後も木造建築に取り組んでいただきたいです。



KITOKI(東京都中央区)
RCメガストラクチャー+木造3層構造のコンビネーションによる店舗兼事務所ビル。外観から木材の活用がしっかり見て取れ、立地を考慮しても多くの人も目に触れるため、混構造のアピールが期待できる。1階には飲食店とコミュニティスペースがあり、人が集える工夫がされている。

サステナブル木造建築物等先導事業(木造先導型) 詳細はこちら ▶ <http://www.sendo-shien.jp/>
再生産可能な循環資源である木材を大量に使用する大規模な木造建築物等の先導的な整備事例について、その具体的内容を広く国民に示し、木造建築物等にかかわる技術の進展に資するとともに、普及啓発を図ることを目的に国土交通省が実施する補助事業。
先導的な設計・施工技術が導入される大規模な建築物の木造化を実現する事業計画の提案を公募し、その内、上記の目的に適う先導的な提案を国が採択し、事業の実施に要する費用の一部を補助する。

お問い合わせ先 ▶ 一般社団法人 木を活かす建築推進協議会 〒107-0052 東京都港区赤坂2-2-19 アドレスビル5F <https://www.kiwoikasu.or.jp/>